

ワンポイント・ブックレビュー

三浦 展著『下流社会 第2章 - なぜ男は女に“負けた”のか』(光文社新書、2007年)

本書は、そのタイトルからも一目瞭然であるが、80万部の大ベストセラーになった『下流社会 - 新たな階層集団の出現』の続編である。

格差問題の火付け役ともいわれる『下流社会』であるが、著者は火付け役については経済学者の橋本俊詔氏、教育社会学者の刈谷剛彦氏の名前を挙げており、自身は階層格差の拡大・固定化による意識の変化、消費の変化を消費社会研究者として研究した結果、「火に油を注いだ」だけであるという。確かに、マーケティング雑誌の編集長を長く務め、自らを消費社会研究者と位置づける著者らしく、前著では消費社会をその視点として新たな階層の出現を描いたのである。

本書は、この前著で示したいくつかの仮説について、全国男性1万人を対象としたアンケート調査の結果から検証している。例えば「上流：中流：下流 = 15%：45%：40%」という仮説は、調査結果からほぼ同様の結果が示されており、実際に下流社会がはじまっていると指摘する。逆に、「下流ほど自民党とフジテレビが好き」という仮説は、「自民党支持は上流ほど多い」という結果で否定されており、この点については前回の調査サンプルが小さかったことなどを反省している。このような仮説検証に加え、前著で類型化した男性・4類型、女性・5類型それぞれについての仕事、政治、性格、結婚など幅広く意識を検討し、これらの補完として2次調査(サンプルを落としたアンケート)や、未婚・子なし女性へのアンケートなども実施している。

しかし、新書であるがゆえか、残念ながらいずれのアンケートについても詳細な内容は示されていない。インターネット調査であることや全体のサンプル数はわかるのだが、サンプル構成の詳細は不明で、層別にした際のサンプル数などが示されていないグラフ・集計も多々ある。つまり、数値の差に統計的有意性があるかどうか不明瞭であり、実際にはかなり少数のサンプルで分析をしている場面も多いと思われる。もちろん、数値だけでなく、著者自身の観測や経験から推察・分析している面もあると思うが、こちらが見ることのできるカードは調査結果の数値だけであるため、話が大きく飛躍しているように感じる人が多いのである。そして、その分析内容はかなり独断的で、厳しい論調であるケースが多く、読み手によっては反感を感じると思われる。実際、インターネットなどで本書を読んだ人の感想をみると、批判的な意見が目につき、著者の主張を受け入れられない人も少なくない。

これらの点から、今回の結果が世間一般の傾向を示したのかどうかについてはまだ議論の余地が残るといえ、目的としていた仮説が実証されたかどうかは不明であるといわざるを得ない。また、仮説検証に軸をおいたことで消費社会の視点が薄くなってしまっていること、サブタイトルの「なぜ男は女に“負けた”のか」についてほとんど言及がないことも残念であった。

それでも、マーケティングの世界に長く身を置いていた著者だけあって、キャッチーな言葉で話が展開していくことで、読みやすいとは感じる。さらに、「正社員になりたいわけじゃない」、「妻に求める年収は500万円以上」、「ハケン一人暮らしは三重楽」など、目を引く言葉の使い方には流石と思わせるところもあった。

なお、本書の「はじめに」に、おなじみの“下流度チェック”が掲載されている。示された10項目(男性の場合は12項目)のうち半分以上当てはまる人は下流的であるとされる。幸い(?)筆者は半分以下であったのだが、中流以上であると思って良いのだろうか?(T.K)